なぜペルシア語はForward Gappingが基本なのか
－SOVから逸脱するいくつかの証拠－

Jahedzadeh Shorblagh
京都大学大学院

Gapping とは，同じ動詞を持つ二つの構文が並列された場合，二つの動詞のいずれかが省略される統語処理システムで，普遍的な言語現象である。並列された構文では，先の動詞を残し，後の動詞を省略する現象を Forward Gapping(FG)，先の動詞を省略し，後の動詞を残すのを Backward Gapping(BG)という。Ross(1970)によると日本語のように語順が SOV である言語では Gapping が BG となる。語順が SVO である英語のような言語では Gapping が FG の形で現れる。

(1) Watakusi wa sakana o, Biru ha gohan o tabeta. (Ross.J.R 1970)

I (prt) fish (prt), Bill (prt) rice (prt) ate

多くの先行研究ではペルシア語の語順が日本語と同様 SOV とされている[1]。平叙文の基底語順が SOV である言語では動詞が常に構文の最後に生起することが求められるが，ペルシア語は Gapping が基本的に FG である。本研究では，なぜペルシア語は日本語と同様 SOV 言語とされているのに Gapping の基本が FG となっているのかという問題を考察する。FG が基本的と言えるのは，人称や数がいかに異なっていてもすべての場合において FG が成り立つことを意味する。ペルシア語でも次の２つの現象が見られる。

1：FG では異なった人称や数の非等位性は問題にならない。例(2)

2：複文では SOV から逸脱し，SVO 型の特徴も備えている。例(3)と(4)

(2) man čāy nūšid-am, ū qahve (Ø)

I tea drink PAST-1Sg, he coffee

Ø＝ nūšid (drink-PAST-3sg)

(I drank tea and he coffee.)

(3)man fekr kard-am [to rafti.]

I think-PAST-1sg you go-PAST-3sg

(I thought that you had gone.)

(4)pul jam? Mi-kon-am [tā māšin be-xar-am.]

Money gather Ind-do-1sg in order to car Subj-buy-1sg

(I am gathering money to buy a car.)

複文ではVは左側に移動する傾向が強く（例４），ムードを表す動詞はSVO形式で定着している（例３）など，ペルシア語は単純にSOV言語だとは言いきれない。つまり、ペルシア語はSVOの特徴も備えており，日本語のような厳格なSOV言語ではない。複文でGappingがFGとなっているのは，人称と動詞の不一致によって生じる非等位的な並列を避けるのに動詞を移動させてVを先に置くという，いわゆるオープンな形式をとりたがる性質からくると考えられる。ペルシア語ではBGは等位的な三人称同士の場合のみ可能であり他の人称ではその認定に差異がみられる。従って，「FGにより人称の不一致が回避できる」という理由でペルシア語ではFGが基本となっていると考えることができる。

---

[1] Soheili-Isfahani(1976), Lazard(1992), Taghvaipour(2004), Karimi(2005), Aghaei(2006), 吉枝(2011)